



カレブ通信

2011 年 1 月 15 日
第 1 号

1 カレブの会とは

この号の内容

1 カレブの会とは

2 カレブの会 1, 2 月予定

3 メンバーからの報告

「カレブ横浜の立ち上げを祈る」

4 とりなし

5 エッセイ 「喪失」

「今や私は、きょうでもう 85 歳になります。・・・どうか今、主があの日約束されたこの山地を私に与えてください。」（ヨシュア 14:10, 12）このカレブの願いはカレブの会のスピリットをよく表わしています。定年退職してから日本人は、なお 30 年は生きるといわれる時代になりました。そこで、定年後は主から預かったタラント（マタイ 25 章）や波乱に富んだ人生の豊かな経験を生かし、神と人に仕えるため、私たちは二つの目的を掲げました。

1) 夢をいただき、夢を実現するために助け合う

退職後の人生のために夢を求め、その夢をいただいたなら、夢が成長し、実を結ぶために助け合います。このために、カレブの会のメンバーは共に集まり、互いの関係を深めていきます。カレブの会への入会は原則 60 代からですが、50 代からでも参加できます。退職後の準備をするために、退職されている方々との交わりを通してヒントを得るためです。

2) 人生のソフトランディング（軟着陸）を助け合う

長いこと名刺に肩書きがあった人生から、何も無い生活へ。家族と共にいた生活から夫婦だけの生活、さらにはシングルへ。健康なからだから不調を味わうステージへ。人のお世話をしてきた人生から介護される生活へ。私たちの人生は、こうしたいくつもの節目を通過してゆきます。そんな通過点を互いに助け合うのが二つ目の目的です。

こうした生き方が、私たちの成長をも促し、隣人へ福音の種を蒔き、神の国を広げてゆくものになることを期待しています。私たちは活動中心ではなく、関係を大切にしながら人生の後半にふさわしく、ゆっくりと、御国にふさわしい生き方を目指します。

<2009 年 4 月 カレブの会で語り合った二つの目的>

彼らは年老いても、なお実
を實のらせ

みずみずしく、
おい茂っていきましょう。

詩篇 92:14

2 カレブの会 1, 2 月予定

<東京カレブの会>

1 月 21 日（金） タ 6 : 0 0 ~ 8 : 3 0

お茶の水 O C C ビル 4 0 2 号室 国際ナビゲーター集会室

- 1) これまで世話人としてご奉仕してくださった星野隆三さんに感謝
- 2) それぞれの新年度の期待を分かち合う
- 3) 2011 年度の東京カレブの会の今後の計画内容の検討
- 4) 新しい参加者の紹介

<宇大（宇都宮大学 O B）カレブの会>

1 月 29 日（土） 午後 3 : 0 0 ~ 5 : 3 0

メンバーの自宅（栃木県佐野市）にて

今回の学びのテーマ：

「福音のためのインサイダー」（発行 国際ナビゲーター）を参考に
定年後の生き方を話し合う 50 代の人々

<宇都宮カレブの会>

2 月 5 日（土） 午後 3 : 0 0 ~ 5 : 3 0

シャロームにて

- 1) 新年の分かち合い
 - 2) 話し合いのテーマ：「孤族の国」で光となるには
 - 3) 仙台の参加者との交わりと意見交換
- この日、仙台から二人の方が特別参加予定

・・・仙台でカレブの会をスタートする参考とするため

<カレブ通信の予定>

「カレブ通信」第一号は有志のご協力をいただいて出来上がりました。今後「カレブ通信」がカレブの会の交わりの輪を深め、広げてゆく一助になるものと願っております。これからもみなさまと共に試行錯誤しながら、この奉仕を進めていきたいと思ひます。

次回から、クリスチャン新聞（2011 年 1 月 2.9 号）に掲載されたカレブの会の三人のメンバーのストーリーを順次掲載していきます。みなさまからの自由な投稿をお待ちしています。

送り先 jpnnav_ogawa@ybb.ne.jp 小川吾朗

"カレブ通信は、

各地に広がるカレブの会の
メンバーや友人たちのコ
ミュニケーションの場として
用いられます。"



宇都宮カレブ 集会の様子

3 メンバーからの報告

畠山義則さん

カレブ横浜（仮称）の立ち上げについて

1) カレブの会・目的 （カレブ東京引用）

基本的には、東京と同じです。

ひとりひとりが「生涯現役」の「カ・レ・ブ」であることを目指します。

カ：神を愛し、隣人を愛するために自分を捧げます。マルコ 12 章 29~31 節

「12:29 イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。

『イスラエルよ。聞け。われらの

神である主は、唯一の主である。 12:30 心を尽くし、思いを尽くし、
知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』

12:31 次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せ
よ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」

レ：連体し、助け合います。ロマ 12 章 9~18 節

ブ：分散、拡大してゆく運動となることを願います。マタイ 28 章 19~20 節



畠山ご夫妻

2) カレブの会横浜の意義

- 場所を拡大することにより、時間的、経済的負担を軽くし、更に新しい
枠組み（人間関係）を期待しています。
- 定年直後にかぎらず、定年前の準備段階から定年後の長い間の仲間づく
り（いつでも語りあえる）をし、準備の段階からはげましと、知恵の交換を
する。
- ネット（メールやその他有効なツール）も、今まで以上に活用したいと
考えています。これは地域を越えた、新しい動きに発展する可能性を持っ
ています。（当面は横浜地区で試行します。）

4 とりなし

- 1) 1 月 21 日の東京カレブの会で、2011 年度からの方針が決ま
り、共に歩むことの喜びを分かち合うことができますように。こ
れまで東京カレブの会で世話人としてご奉仕くださった星野さん
に心から感謝します。
- 2) 2 月 5 日に仙台から二人の方が宇都宮カレブの会に参加する予
定です。今後、仙台でカレブの会をスタート時の参考にするため
です。互いによい交わりの時となりますように。仙台カレブの会
の立ち上げが主に導かれ祝福されますように。
- 3) 畠山ご夫妻が横浜でカレブの会を立ち上げます。一緒にスター
トする協力者が与えられつつあります。心と志をひとつにしてス
タートできますように。

"どんなときにも御霊によって祈り
なさい。そのためには絶えず目を
覚ましていて、すべての聖徒のた
めに、忍耐の限りを尽くし、
また祈りなさい。"

エペソ 6:18



5 エッセイ

山本文夫さん

60歳の男性の余命は23年、今後の伸びを考慮すると80歳までは元気な老人。これをサラリーマンの延長で過ごすのはもったいないと考え、2008年、62歳で三井住友海上を退職し、東京から静岡県伊東市川奈に移住。教会も川奈聖書教会に転籍した。

カレブの会に所属し、小川吾郎さんの導きで自宅を地域の方に開放するオープンハウスを開始した。奇数月に1回、夕方4時から7時まで、讃美歌と昔懐かしい歌、自宅の畑で作る無農薬野菜の健康食、食後の歓談から構成するオープンハウスは東京から移住した別荘族や地域の方に大好評で、札止めとなる日も多い。

開始して2年半を経過、この中から川奈聖書教会の礼拝や子ども向け絵本読み聞かせ会に出席する方々が起こされ、年3回のチャペルコンサートには大勢が押しかける。

また地域の方々に受け入れられた結果、2010年から小室山別荘地自治会長を務め、高齢化した住民の相互扶助の政策が地元新聞に続々と取り上げられている。

喪 失

奥さまが癌にかかれ、在宅のままで筆舌につくしがたい闘いを終えたSさんから「愛する人を失うとき」という本をお借りしました。著者は米国の哲学者、G.L. シツツアー氏。同氏は交通事故で一瞬にして母、妻、子の3人を失いました。

毎晩執拗に忍びよる暗闇、虚無・不毛の海原での苦悶、声にならない苦痛の叫び、日常生活が破断されたことによるアイデンティティーの喪失。これらの混乱のなかで破綻が生じる。シツツアー氏は自らの経験にくわえ、喪失を経験したたくさんの人々の事例を集めて分析した結果を記しています。

「魂は、風船のように弾力性がある。喪失によって怒りや憂鬱や絶望や苦悩に対する許容量が増大する。ひとたび大きくなると魂はさらに大きな喜び、より大きな力、より大きな平安、より大きな愛を体験することができるようになる。この過程は喪失に苦しむ人たちに頻繁に起こる。

やがて神との生き生きとした関係が始まる。喪失によって恵みへ、深遠な霊的な目覚めへと導かれる。最終的に新しい人生を探し始める。そこで私たちは自分たちをこえた何者かの必要を感じ、『聖なる存在の気配』に気づき始める。熱烈に私たちを愛してくれる存在が宇宙にあることを発見する。

私は悲劇的な喪失を経験したことはありません。ただ40年勤めた会社、熱心にそれこそ寝食も忘れるほどに愛した会社を退職したときの喪失感は大きなものがありま

した。緊張感が張りつめた職場、大勢の社員たち、大仕事を仕上げていく醍醐味、これらを一時に失いました。伊東市に転居し、それまでの友人や近所づきあいも遠くなりました。

今はどうでしょうか。地域の方々、教会の方々との交流や大自然から与えられる慰めは、会社生活の延長では決して得られない、予想もしなかった大きな恵みです。

この文章の冒頭に書いたSさんの奥さまと、亡くなられるひと月ほど前に近くの路上でお会いしました。私たちが作るオーガニック野菜をとりわけ好んでくださり、ときには家内が聖句カードをそえて庭の花を差しあげたりしていましたが、それまでほとんど話をする機会はありませんでした。

その日、ご主人のささえを頼りにしてゆっくりと歩いてこれ、私たちと出会うと、10メートルも離れているのに、両手をまっすぐに私たちにむけて

「あー、ありがとう」と叫ぶようにいわれました。両方の目から大粒の涙があふれ続けていました。そのとき、魂と魂がふれあい、あたりを喜びの光がつつみました。まさに「神の気配」を感じた思いでした。

精神科医の賀川乙彦さんは、精神的な苦衷の中にある人に、いま自分が置かれている時間軸や空間軸を変えて考えてみることを勧めています。いまの状況がいつまでも続くわけではないし、今いる場所が自分が住む世界のすべてではないということに気がつくというわけです。シツツアー氏は命が尽きるときに自分の一生を絵に描いてみたら、あの時の喪失の苦痛はその絵の一部に過ぎなかったことが分かるだろうとも述べています。

十字架の上で、イエスは絶命する直前に「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」と叫ばれました。イエスは父であり、主である神と断絶された結果、死にわたされ、黄泉にまで落とされました。このイエスこそ最大の喪失者ではないでしょうか。そこからよみがえったイエスは苦痛の最大の理解者であり、きっと私たちが時間軸や空間軸を変えてみることを助けてくれることでしょう。そして人生のパラダイムを大きく転換させてくれるでしょう。

聖書を否定し、教会からすっかり離れていたカトリックのSさんは、私が主催するオープンハウスの中心メンバーになられ、川奈聖書教会に近く転入会されます。